

「空」がテーマのお墓

見上げれば空があり、私たちは青い空のもとに生きている。自然といえば山や川、海もそうであるが、広く澄み渡った空は何ものにも代えがたい。過去の入賞お墓から空、あるいは宇宙をテーマにしたお墓をピックアップしてみた。

第 11 回で入賞した宮城県仙台市泉区の大沼千佳子さん（当時 62 歳）のお墓は墓碑が「青い空」。深い思いの込められた「空」である。結婚して暫くは仕事の関係で関東地方を転々とした。二人目の出産の無理から思いがけない、長い闘病生活を送った。「灰色のクレパスでぬりかえられた」日々から「青い空」がきっとやって来る。その夢に向かって生きてきた。やがて故郷の仙台に帰って来て、主人の脱サラ、自営業、普通の生活ができる『青い空』が戻ってきた。苦勞をかけた 2 人の子供達も、それぞれ結婚し、4 人の可愛い孫にも恵まれて、私達は幸せです。自分たちのお墓は『青い空』にしようと 2 人で決め、温めていた夢を実現した。



第 13 回でニューデザイン大賞に入選した宮城県仙台市の星 由輝江さん（当時 30 歳）さんのお墓は、澄んだ夏の夜空を見上げるように、黒い墓石に流れる銀河と明るく輝く三ツ星のレリーフ。真ん中には「空」の一文字も。シンプルではあるが洗練されたデザインで、「宇宙」を考えさせ、私たちが生きている「地球」を思い起こさせ、「人生」を、そして「あの世」に思いを馳せさせる「流星ときらめく三星レリーフ入りお墓」。

「満天の星空の中で、流星がすじを残して消え去るように、私たちの心に大きな光跡を残して逝った」祖父のために建てた。「祖父は今も、この空のどこかで、温かな眼差しでこれからもずっと私たち家族を見守ってくれている」と星さん。残された家族に、大きな癒しを与えてくれるお墓になっているようだ。



第 14 回で入賞した宮城県仙台市青葉区的小林 達朗さん（当時 43 歳）のお墓は、死の床でお父さんが描いた「宙」の文字入りお墓。「俺の墓石（はかいし）をつくってこないか！？」。急に病床の父が私に言った。そのとき父は、食道がんで入院したばかりで、多少咳が出るものの、しっかりとしたものであった。なぜそんな急に墓石をつくれ！と言うのか・・・まだ死を意識するには早すぎる

だろう。正直私は戸惑った。しかし、父はそんなことにはお構いなしで、「もう構想はできている。これを見てくれ。」と言って、自分のデザインした墓石を私に見せた。しし座流星群が飛来したときの彗星と「俺の書く文字を入れてくれ。宇宙の「宙」という字を考えている。ここ（病床）で書くから、できたらその文字を石に刻んでくれ。」と、続いた。病床の父親とやりとりをし、お墓づくりを開始したが、お父さんはその完成を見ずにこの世を去った。墓石が完成したのは、49日の法要の時だったという。



第15回のデザイン大賞を受賞したのは東京都八王子市の小野麻紀さん（当時35歳）と有紀さん（当時31歳）の空に浮かぶ虹のお墓。半アーチ型（四半円）の墓石に、鮮やかな赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の7色の虹をペンキで描いた天国に架かる「虹の橋」型。虹の橋の表面には人とペットの足跡が刻まれ、虹の下には空を連想させるガラスがはめ込まれている。ペット好きの姉妹が、亡くなったペットと、天国で再会できるように願ったペットと一緒にのお墓。決して大きく、費用をかけた豪華さはない。しかし、モノクロトーンの墓地の中で、色鮮やかに光彩を放つ。小さいがキラリと光るセンスが評価されて受賞した。



第18回で入賞した静岡県浜松市西区の古橋 初藏さん（当時35歳）のお墓には「空」の文字が刻まれている。父親、母親に空から見ていてほしい、見守ってほしいと願って彫り込んだという。空は誰にも平等でいつも見守ってくれている。

父親は洋服の仕立てを仕事にし、一方ボランティアで30年以上「交通安全指導員」として、園児・児童・学生の交通安全のために街頭に出て指導を続けていた。そんな父親が、運悪く事故の多い交差点で指導している最中、交通事故に巻き込まれ半身不随になった。退院後の介護をしたのは母親。そんな母親もがんにかかり亡くなる。重なる不運を嘆いたが、母親のためにこのお墓を建てた。

